

2. 『飛翔』に見る総合科学部

『飛翔』10周年を迎えて

編集部

総合科学部が10周年を迎えたのに続き、『飛翔』も今年で創刊10周年を迎える。迎えるというよりたどりついた、とでもいったほうが適当かもしれないほどの細々とした流れではあるが、総合科学部に籍を置く者としての喜怒哀楽を、我々なりのフィルターで見つめてきたという自負はある。10周年を機に、『飛翔』を通じての総合科学部について考えてみたい。

1) 『飛翔』創刊のころ

比較文化研究講座助教授 水島 裕雅

1. はじめに

総合科学部報の『飛翔』が、その前身の『総合科学』も含めると、この7月で満十歳になる(『飛翔』自体は来年3月で10年である)。6年ぶりに広報委員に任じられ、『飛翔』の編集を割りあてられて、学生・教官合同の編集会議に参加した折、26号を数えるにいたった『飛翔』誌を見て、つい感慨無量になって、『飛翔』誕生の経緯や、前途を危ぶまれた学生・教官合同の編集形式などについて少し語ってしまった。すると「『飛翔』の10年」という企画で、何か思い出話を書くようになってしまった。僕は『飛翔』誕生の際も、その後も脇役でしかなかったし、当時の責任者の方々も御在任中でもあるので極力固辞したが、むしろ脇役の裏話を御所望のようである。それにまた、教養部時代の『広大教養』、1号だけで終わった『総合科学』、さらに『飛翔』の創刊とその後の数号に関係した人もあまりいないようなので、個人的回想も何かの意味を持つかも知れないと思い引き受けることにしたが、記録もとっていないので、まったく独断と偏見で自分の思い出と感想を書かざるを得ない。そう思いながら、幸い厚生補導係に『総合科学』と『飛翔』のバックナンバーを揃えて保存されておられたので、参考にと思い借り出してみた。

2. 10年の歴史の重み

「10年ひと昔」とは良く言ったものだ。そろそろ遠い思い出になりかかっていたものが、このバック

ナンバーとともによみがえってきた。それにしてもこのバックナンバーの一揃いはズシリと重い。優に1キロは越えているだろう。いや目方などはどうでもよいことだ。その内容が実に重いのである。総合科学部の10年の歴史がここに刻まれている。ここに書かれたそれぞれの記事、それぞれの言葉が、あの熱っぽい編集会議の思い出とともに、今なお語りかけてくるのである。「学問とは何か?」「総合科学とは何か?」「総合科学部は何を目指しているのだろうか?」等々。そうした記事の分析は「特集の特集」その他でなされる予定であるので、ここでは学生と教官の共同編集という、日本の大学の学部報としてはきわめて稀と思われる編集形式の成立についてふれておきたい。

3. 教官・学生の共同編集について

僕はかつて『総合科学』(教官のみの編集)創刊号の「編集後記」で次のように書いた。「『総合科学』は教官と学生と事務官相互の交流の場となることを期待している。したがって次号よりは学生諸君の編集による学生欄を設けたいと思っているので、どしどし投書や意見を広報委員会まで寄せてほしい。」日本で最初の総合科学部の創設と発展のためには、学生側の主体的参加が是非とも必要であるという考えは大方の意見でもあったと思う。幸いにして、この「学生諸君の編集による学生欄」はさらに発展して、『総合科学』改め『飛翔』となった折、学生・教官の共同編集という現在の形になった。その点に

ついて、『飛翔』創刊号の「編集後記」では次のように説明されている。「昨年7月の創刊号（これは『総合科学』のことである・筆者註）で書いたように、学生諸君との共同編集を最初から考えていたのであるが、当初教官側の委員には多少事の成否を危ぶむむきがないでもなかった。それというのも従来一般に学部報なるものが弾力性に乏しい無味乾燥なものに傾きがちで、学生の興味をひかないきらいがあったのだ。一つにはこの事実が逆に教官、学生一体となった共同編集という形を我々にこいねがわせた契機でもあった。新しく創設された若い学部のもつ可能性からして、それは実現できるはずである、と。」

この『飛翔』の編集は「学生の興味をひかない」のではないかという心配は杞憂に終わったようである。現に目の前にあるこの部厚い『飛翔』一揃いが何よりもの証拠である。学生側委員の集まりが悪い年もあったであろう。しかしいったん興味をもって主体的にかかわれば、思いがけぬエネルギーで事を進めていったのはむしろ学生側編集委員の方であったと思う。むろん事務の方々の援助が大きかったということも特筆しておかなければならないが。教官側編集委員は時にそのエネルギーに圧倒され、その暴走をおさえるのに苦勞するといった場面もあったほどである。

4. 『飛翔』の創刊

たしか当時の学生側委員は公募されたはずである。そして『飛翔』という誌名も公募によった。「百をこえる応募名の中から委員全員でこの名前をえらんだ」と先の「編集後記」にある。学生・教官合同の編集委員会での名は選ばれたのである。

『飛翔』創刊号の表紙裏には「『飛翔』創刊にあたって」という学生側広報委員の次のような言葉が記されている。「大学紛争以後、大学の機関に学生の参加が認められることは稀である。それがこの機会に総合科学部広報委員会という形で、かなり発言権のある場が得られたということ（私たち学生は）慎重に考えてみる必要がある。そこに教官・事務官の暖かい愛情を感じると共に、私たちは、内外の厳しい現状の中で、“自分たちの学部は自分たちの手で創っていくのだ”という総合科学部生としての誇りと主体性をもってこの仕事に積極的に参加していくことが必要であろう。ここに創刊号を送り出すにあたり、私たちは、この『飛翔』を通じて学生・教官・事務官のコミュニケーションがより一層深ま

り、そこに相互の信頼に基づいた学部の創造発展の道がひらかれることを望んでやまない。総合科学部に永遠の飛翔あれ！」

希望と誇りと情熱とに満ちた若々しい言葉である。前途に夢と不安を抱き、しかも感謝の気持を失わない、初々しい青春の言葉である。この学生側委員の言葉にどれだけ応えることができたかということは、学生ばかりでなく教官側も自分の胸に聞いてみなければなるまい。「相互の信頼に基づいた学部の創造発展の道」を切り開くことは決して容易なことではなかったということは、たとえば『飛翔』7号の「編集後記」に書かれた、環境科学コース問題に関する苦渋に満ちた表現からも推測できることであろう。

しかしながら、創刊以来一貫して「学問とは何か」「総合科学とは、総合科学部とは何か」「われわれは今どこにいて何をなすべきか」を常に問い続けている学部報が、日本に今どれだけあるであろうか。それだけでも、教官の自己顕示もしくは自己満足あるいは単なる教官側から学生への一方通告にすぎなかった『広大教養』や『総合科学』（少し言いすぎかも知れぬが）が『飛翔』にと発展したことは私見ではよかったと思う。

5. おわりに

「『飛翔』なんかまだやってるのか」あるいは「もうやめてしまえ」と言われる方もあるそうだが、よかれあしかれ『飛翔』は総合科学の歴史であり、顔であったと思う。歴史をふりかえり、そこに何らかの教訓を得ようとする人、あるいはそこから未来を見つめたいと思う人は、ぜひ一読していただきたいものである。

2) 私の総合科学部観

編集委員 岡本 光治

総合科学という学問は、何らかの必要に迫られて生まれたのではあるのだが、現在においても、いったいその必要性はどこにあるのか、この学問が目的とするものは何なのか明確にはなっていないようである。中にはこの学問のそうした不透明さに、ある種の希望や可能性の楽しさ、といったものを感じる人もいようだが、このままこの学問を単なる可能性にとどめておくことはもはや許されないものであり、明確な方向性を見出すことが必要である。もしもその結果が「無指向性」と表現される事になったとしても、いったいどういう意味で方向性を持たないのであるか、あるいは持つべきでないのかをはっきりさせるべきであろう。

思うに、総合科学には2つのあり方がある。一つは、ある問題解決（たとえば地域開発など）のためにあらゆる学問・技術を「総合」、つまりミックスする学問としての総合科学、いわば実用的総合科学であり、もう一つは、あらゆる学問の限界性や境界、諸問題に対する妥当性（これこれの学問を考えるにはこれこれの学問を適用すべきだということ。ただし、例えば人間の健康を考えるのは医学や心理学、といった具合に単純に対応させるのはあまりに幼稚

である。なぜならこの場合、「健康」の概念そのものが学問によって差がある、というより、それを考えるに適当でない仕方、つまりそれぞれの学問の内にはびこっている偏見によって考えられ定義付けられているからである）について考える純粋学問としての総合科学（いわばこれが学際学と呼ばれるものであろう）である。

「平和学」という学問がある。この学問は、まだ生まれたばかりであるせいか、かなりのあいまいさを含んでいる。なにしろこの学問の中心となる「平和」という概念そのものが、まだ実にいいかげんであり、しかも、しっかりと問いかけられてもいない。たしかにこの概念を“定義”することは、人間を“定義”するのと同様難しいし、人間を単に生物学的のみでは“定義”しきれないように、平和という概念も非常に豊かな意味を持っていて、単に社会学的、政治学的に“定義”できない。しかしながら、人間について考えることが可能であり、かつ必要であるように、平和について、自由について考え、問いかけることは十分にできることであり、絶対に必要なことである。僕は、純粋学問としての総合科学が、この問題に貢献できる事を信じている。

3) しかし、しかし…なのだ

～『特集』の特集～

編集部

『飛翔』は今年で10年目を迎える。その間に我々歴代編集委員は27冊の『飛翔』を発行してきた。ところで『飛翔』というのは、学報誌としての性質上、現在の問題をトピックス的に“報ずる”という役割の他に、“記録する”という役割も持つものである。今回は、特に、その記録するという役割をもとに、27号の『飛翔』で企画された特集について考えてみたい。

今までに『飛翔』で企画された特集は次の通りである。

第1号（1975.3.15 発行）

座談会「酔中放談」

学生のプロフィール

第2号（1975.7.5）

街角の声 — 総合科学部に対する内外の反響

研究室レポート — 初めてのバース・ディ

第3号（1975.12.5）

私にとって○△とは — 学生の未熟なつぶやき

三つの書評

第4号（1976.3.20）

三つの書評

第5号（1976.6.20）

三つの書評
 第7号(1977.10.31)
 教官紹介
 第8号(1978.3.20)
 49生(一期生)にきく
 第9号(1978.7.5)
 四コースがもの申す — コースを考える —
 俺達活躍中 — 団体紹介 —
 第10号(1978.10.31)
 飛翔初登場 — 総合科学部の事務組織 —
 第11号(1979.2.10)
 学生研究室からのたより
 大学祭奮闘記
 第12号(1979.3.24)
 4年生に聞く
 第13号(1979.9.10)
 「じゃがいも畑は今…」 — 総科生アンケート
 第14号(1980.1.10)
 「コース決定」に関する座談会
 第15号(1980.3.25)
 舟出の時に交すコトバ — 卒業生にきく —
 第16号(1980.11.15)
 座談会「大学における学問研究」について
 第17号(1981.1.20)
 「卒業」そして今…
 〈実社会へ出た先輩達は何を考えているか〉
 第18号(1981.3.25)
 Take of Soka — 旅人たちの詩 —
 座談会「総合科学部の特性及びそのヴィジョン
 を語る」
 1年間をふり返って
 第19号(1981.9.5)
 56年度生意識調査
 第20号(1981.12.15)
 大学祭始末記
 教育実習レポート
 第21号(1982.3.25)
 飛翔するものたちのメッセージ
 — 卒業生アンケートから —
 第22号(1982.7.5)
 総合移転を考える
 第23号(1983.1.10)
 昭和57年度教育実習レポート
 第24号(1983.3.25)
 我が「青春」に悔いなし…!?

第25号

総合科学部を考える

第26号(1984.3.24)

総科! そうだったのか

第27号

世界にはばたけ! 総科生

以上、27+αの特集の中で、特に総合科学部の問題点について考察している内容をまとめると、だいたい次のように分類できる。

- ① 総合科学部とは何か、という本質的な問題
 総合科学部とは一体何をするとところなのか。
 それぞれのコースがどういう理念とヴィジョンを持つものなのか。
- ② 学際的研究に対する問題
 学際的研究が実際行われているのか。
 学際的研究が仮りに可能だとしても、学際的
 教育というものは可能なのか。
- ③ コース設定の問題
 各コース間の壁が厚くなり、柔軟性に欠ける
 のではないか。
 コース内での群の設定は必要なのだろうか。
- ④ カリキュラムの問題
 単なる“つまみ食い”に過ぎないのではない
 か。
 広く浅くで自分の専門を深められないのでは
 ないか。
 単なる“教養”に過ぎないのではないか。
- ⑤ 学生の側の研究面に対するパーソナルな段階の
 問題
 何をしたいのかかわからない!!
- ⑥ その他
 就職問題・教育実習
 「教養学士」に対する問題
 一般教育についての問題 その他

『飛翔』においてなされている特集は、ほとんど
 が上の6つに分類できる。もっと正確に、上記の6
 つの項目における理想と現実のギャップについて、
 と言うこともできる。実際、バックナンバーを第1
 号から27号まで、たんねんに読み返してみると、同
 じようなテーマが手を変え品を変えて出現し、その
 考察もほとんど同じような内容なので、半分位まで
 読んでうんざりしてしまった。考えてみれば、先生
 方が10年間分の総科の歩みを見て来られたのに対し
 て、学生は毎年入れ変わって、それぞれが、以上6
 つについて一から考察を迫られるのであるから、こ

それは当然のことかもしれない。しかし、我々は、それを無益な繰り返しだとは思わない。無益だとしても、続けねばならない。たとえ、それが幼稚で、総合科学部がこれから築いてゆくであろう長い歴史の中では、ほんのせつな的なものにすぎないとしても、『飛翔』を通じて学生が総科を考え、総科を憂えることは「相互の信頼に基づいた学部創造発展の道」(第一号 巻頭辞)であるからだ。恐しいのは結果的に捨て石となることではなく、捨て石に甘んずることだ。

最近『飛翔』をつぶせ、との声が高い。学生側の記事に、学部報誌として幼稚な内容や不適當な表現等があったことは否めないし、その理念はともかく、この国家財政難の折、いやしくもウン十万円を使って

発行するに価する内容を伴っているか(どこかで聞いたことのあるセリフだ)、と言われると、我々としては非常に心もとない。だいたい学生編集委員としても、編集の作業は、かなり大儀い。毎週何時間かは確実に企画会議にとられ、原稿の詰め時期は試験期間と重なる。明日はドイツ語の試験という日に原稿をあげねばなくなったりすると、これはもう、成績はともかく、精神衛生上よろしくなく、あの時あのケーキを食べてしまった自分をうらめしく思うばかり。教官側の編集委員の先生方、事務官等の御苦労は況んやである。

しかし、しかし…なのだ。

(文責・向山 敦子)

斬気淳二の飛翔批評話 — ②



「出席なし、ノートなしデスマッチ!
あ〜と一発勝負をかけたあ〜っ」

3. 昭和59年度教育実習レポート

教育実習雑感

教職委員会 上垣内孝彦

本年も6月4日より6月16日までの附属福山中・高等学校における、本学部生41名、院生4名の教育実習は無事に終了しました。僅か2週間で、2単位修得の科目に過ぎないと軽く考えている人があるかも知れないが、ここに到るまでには附属学校の先生方の御尽力は勿論のこと、本学部の事務長を始めとして学務係の事務官の方々の労苦や、教職課程委員会の先生方の前年度秋頃からの打合せとか宿舍確保などへの奔走があったことで、縁の下の力持ちがあったればこそです。

本年度の教生諸君は立派に職務を果たし好評裡に実習を終えました。私達、お世話した教職課程委員会のメンバーも等しく安堵しています。ところが、先般飛翔編集子より本稿の依頼を安受合いたした小生は、はたと困惑しているところです。そこで、教育実習に関する雑感、または心得の条を書き下して、その責を免れさせて載く次第です。

1. 教育実習は教生にとっては、教育のテクニックを修得する場かも知れないが、附属校の生徒にとっては常に学習の本番である。単なる教育の練習台にされてはかなわない。いつれ附属の先生方の修正・補填があるからと甘えてはならない。たとえ、教授技術は未熟でも、真摯な取組みは琴線に触れるものである。
2. 教える場に立って、はじめて己の無知なるを知る。

— 実習生の声 —

教育実習 — 雑感

環境科学研究科 宮城島浩之 (数学)

教育実習が、私に残してくれたものは何か — そうそれは……と、いきなり青年の主張をしておおうかと思ったが、止める。なぜ止めるかという私の感激を、ダラダラと書き綴ったところで、そんな代物は後で私が見て「ああ、よかったなあ」とタメ息をつく役にしかたない。どなたでも、実習に行けばその人なりの感動を胸に帰ってくるだろうし、とりわけ私のそれを文章にして人にお見せする

ここに到っても自分の理解の深さに気付かない者があれば、それは救い難い。生徒の前で「このことは学界の現状ではわからない」と自信をもって言い切れることの如何に少ないかを痛感する良い機会である。

3. 「学ぶこと」の真髄は教えて始めてわかる。

「教える」ということは自らの知っていることをすべてさらけ出すことではなく、一段と高いところから、高い学識の中を再構成して、理解し易いようにして小出しせねばならぬ。

4. 付随的ではあるが、同じ教師への目的を持つ同志が同じ釜の飯を喰うことの意義を噛み締めよ。

永い学生生活の中で起居寢食を共にする機会を味わえなかった人にとって、10日余りの短い日時といえども、この機会を持ったことが生涯の非常に貴重な体験となることであろう。

5. 蛇足として、新教育職員免許法では教育実習が重視される方向で改正されようとしている。

全く当然である。デモ・シカ先生の排除を願えば……。教育実習は学ぶ者が立場をかえて、真の学ぶことを知り、若い人格に触れて、人格形成、人間完成への在り方を知る最良のチャンスである。

附属福山中・高等学校の先生方に重ねて感謝の意を表して筆を擱きます。

必要もないし、意味もない、と私は思うからだ。

では、というわけだが、実のところそれほど有意義な事を書くかということ、そうでもない。本当はどうでもいいような事を書こうと思う。ただしうそは書かないことにした。

2週間、教育実習の期間はたった14日だった。この「たった」というのには、異論のある人もあろうと思うが — 取りあえず、割と短い。その間に私達

は授業を参観し、自らもやり、反省会をする。取りあえずは、朝8時過ぎから午後5時ころまで学校で「教師」として過ごしたことになる。

もちろん、一日中スケジュールが詰まっているわけではなくて、何をしてもいい(額面通りの意味に取ると、大変だ、ここは大学ではないのだから。)時間があるわけだ。そんな時間、私達は予習をしたり復習をしたり(!)する。しかし、それもしなくていい場合もある。生徒と話しをするチャンスも、こんな時にできたりする。(もっとも、授業中にはそこらをうろついている生徒などいない)(わけではないが……)(生徒を善導するには勇気がある。)(最初は大学と間違えて空きコマだと思った教生もいる。)(私だ。)(あの生徒、ちゃんと教室へ行ったろうか?)

勇気さえあれば、いくらでもチャンスをひろえるし、そして色々考える事が手に入るだろう。つまり、得をするわけだ。めんどくさがりで、シャイなあなたは、外交的な同僚のそばについて、彼と生徒の間の雑談に加わるのもいいかもしれない。

そんなことばかり——すなわち、生徒と雑談ばかりしていたのでは(一部には数学科の教生は遊んでばかりいるという声もあった。)(うそである。)(わざわざ福山へ来たかいたがない。本当にやるべきことは授業、これである。

内容は、当然のことながら(数学は)割と易しい。

当たり前である。わからないことを人に教えられはるはずがない。私はこの実習で「内容が平易であれば教えるのも簡単である」という命題が、必ずしも成り立たないことを実感した。かくて私達数学科は、夜は宿舎で、昼はコンピュータ室で、複素数や数学的帰納法、そして他もろもろの事柄をいかに説明するかを考えたのである。(一部には、数学科が一番早く寝たという声もあった。)(うそである。)

ところで、私達がよく反省会に使ったコンピュータ室は、同時にマイコン・クラブの活動場所でもあった。マシン語の苦手な私は、後輩にZ-80のマシン語を教える生徒を見て、複雑な思いにとらわれた。はっきりいって、彼らはできる。なにしろコンピュータをさわった年齢が違う。コンピュータ関係の職場へ進む方は、後方に御注意あれ。

全くだらだらとした文章になってしまったが、まとめて言えば、次の二点が私の言いたいことである。まず、時間を大切にしよう。

次に、教えるのはやっかいな作業だよ。

ともかく、教育実習は、14日しかない。そして、初めて、就学以来十何年で初めて教える側に立つのだから。

さらに要点をまとめると、次のようになる。

「来年度の教育実習生の方々が、実り多い実習をなされるよう、心からお祈り申し上げます。」

国語教育実習を終えて

地域文化コース 浜岡多佳子 (国語)

長いようで短かった2週間の教育実習を終えて、しみじみ感じるのは「国語」という教科のむつかしさである。中高校生の頃、国語の授業で教師の考え方が強烈に表われてしまうことに疑問や反感を抱いたことのない人は少ないと思う。私も、教える側の押しつけにならない授業を、と願いながらもその具体的な方策がうかばないまま、教育実習に臨んでしまった。

国語科では、2週間で1人あたり3~4時間の授業を持たせてもらった。授業数は決して多くはないのだが、指導案を完成させるまでに時間がかかった。まず教材を読み込んで、自分なりの解釈を持つこと(これが肝腎だ、と指導教官からの忠告)それから指導計画を立てる。導入に5分、通読5分、語句の理解8分、段落区分3分…等の時間配分。どこでどんな発問をするかを。それに対する生徒の返答を予想



斬気淳二の飛翔批評話 — ③

就職情報

する。実習生同志が生徒と教師になって質問ごっこのようなこともした。もし生徒から突拍子もない答が出てきたら、と考えるとおそろしい。どうにかして言いくるめて指導案どおりに進めなくては……とふと気づけば完全に自分の解釈を生徒に押しつけようとしている私である。これでは味気ない授業になるのは目に見えている。

私が担当したのは中1のA組で、その第1回目の実習授業のことである。前半は指導案どおりに進んだのだが、授業のヤマ場に入ってEさんを指名したとたん、彼女は私が後半に予定していた筋書すべてを、手短かに何気なく喋ってしまったのである。こ

の発言をそのまま板書すれば、残る25分間、私のすることは無くなってしまう。そこで私も内心冷や汗をかきながら何気ない風を装って、発言の一部だけを取り上げて大部分は無視する形で、かろうじて自分の指導計画へと引き戻したのであった。

こんな状態の私に、押しつけではない生徒の獨創性を生かした授業をすることなど、程遠いといしか言えまい。もっとも、たった2週間の実習生に、誰もそこまで期待してはいない。しかし、折角の機会なのだから、自分はどうな授業をしたいのか、理想の形を明確にした上で実習に臨むべきだったと反省している。

不真面目なまでに真面目な優等生とともに

社会文化コース 橋本 記一（現代社会）

額に汗をにじませ、必死で説明する。あせればあせるほど、何をしゃべっているのかわからなくなってくる。銀ぶちのメガネをぐいともちあげ、ネクタイを緩めたところで、声がかかった。

「しょーもない授業。帰れ、帰れ！」

これで勝負は決まった。おぼれかけている者をみれば、ぐいと頭を水中に沈めてみたくなるのが生徒にとって素直な気持ちというもの。かくして、純情な教生は立ち往生し、ぼくらは自由な時間を得た。

それから7年が経って、立ち場は逆転した。かつて教生をなじり抜いたぼくは、今度は、なじられる側に立つことになったのだ。

だからって、生徒にいびられるほどこっちは純情じゃないんだ。だいたい15~16の年齢のやつらなんて素直なはずがない。反抗期のまっさかりの“やんちゃ”どもをどう料理してやろうか、こっちだって覚悟はできている。

それに校内暴力、女子高生死春、退学者続出と教育の荒廃がいわれる昨今。こっちだってハンパじゃないんだ。バカにするんじゃないぞ！

なんて息込んで教室に入った。「起立、礼」昔なつかしの号令。着席してもザワつく教室内。なんのこれしき、ごくありふれたことだ。

「黙らんかい、しばくどお！」

なんて叫ぶのは、テレビドラマに出てくる新任教師みたいでかっこよくない。ここは、ムフフと不敵な笑いを浮かべて授業に入る。おれの話術で授業に引き込んでやる。それぐらいの余裕が必要なのだ。

ところが、こいつらいったいどうなっているのだ。授業がはじまるとたん素直な瞳をこっちにきぎ

けにして、時にはノートをとり、こいつらばくの授業を一心に聞いているじゃないか。もちろん、2~3人の連中は、ぼくがくだらない冗談を言うたびにぶつぶつ文句を言っている。それでも、全体とすればみんなまじめにぼくの授業に聞き入っている。ぼくは授業をしながら不思議な気持ちになった。だいたい、社会科の授業なんて、そんなに真剣に受けるものじゃないんだ。

「おまえら、授業の受け方知っているのか？」

本当に教えてやりたいぐらいだった。

教育実習の間は、実に単調で退屈な毎日が続く。ぼくらは、朝早くに学校に行き、教材研究と称して控室や図書館でダベリ、友人の授業を観察し、3日に一度の割で授業をする。放課後は反省会をして、遠慮しながらお互いの授業の欠点を指摘しあうのだ。

ある日、反省会の後、何やかやで帰りが遅くなったことがある。もう辺りは暗くなっていた。ぼくがうんざりして帰路についていると、「先生！」と叫ぶやつがいる。よくみると担当のクラスの男子生徒だった。「どうしたん、今ごろ」と聞くと、「塾の帰りや」と言う。けっこうやんちゃ坊主だと思ってた生徒なので、「おまえでも塾に行くの」と笑うと「みんな行ってる」と言う。

ぼくらが実習をした広大附属福山中・高校では、ほとんどの生徒が塾に行っているという。「塾に行かないとついていけない」という風潮すらあるらしい。何についていけないのか？もちろん受験にだ。ある教生の授業で、一人の生徒が「そんなことは塾で何度もやった」と言ったという。そうなんだ。ここは進学率抜群の名門校なのだ。ここの生徒の頭の中に

は高1にして既に大学受験がちらついているのかもしれない。

一方で、校内暴力バリバリの学校があり、一方で進学を真剣に考え、素直に授業を聞くこんな学校がある。あたりまえのことなんだ。でも中高生なんて授業を聞かないもの、と思っていたぼくにとっては、こんな素直な生徒は異常としか見えないんだ。

「セックスするのがどうしていけないのですか」こんな質問をした附属の女生徒がいたという。ぼくはそんなうわさを夢見ごちに思い出しながら、教室の脇でうとうとしていた。授業中だった。前で授

業をやっている人の声が、初夏の風とともにさわやかに流れてきた。ふいにごそごそという物音で、ぼくは目を覚ました。一人の女生徒が、床をほうようにして教室を抜け出すところだった。ぼくと目が合うと彼女はペロッと舌をだした。ぼくはニコリと笑みを返してやった。かわいいもんだ。受験に一生懸命になり、授業を素直に聞く“いい子ちゃん”のこいつら。そんなこいつら附属の生徒も性に悩んだり、教室を抜け出したり、けっこうやんちゃして、普通の高校生なんだ。そう思うと、思わずうれしくなって、ぼくは又うとうとし始めたのだった。

教育実習メモ

〈費用について〉

教育実習にはお金がかかるということに気付かない人が多い。総合科学部では、教育実習は広大附属福山中高校ですと決められている。これは理不尽なことだが、大学側が許さない以上、母校での教育実習は認められない。

広大附属福山中・高校で実習をするということは、その間2週間に渡る宿泊費が必要となる。ところがこの宿泊費も、大学紹介の3つの宿舎で全く異なるのだ。一番安い宿舎だと2週間で2千円。一番高い宿舎だと、1日3千円という大きな違いができる。

こういったメカニズムについて、学務からの伝達に十分気をつけておかねばならない。

〈服装について〉

ネクタイはするべきかとか、ジーパンはどうかとか、いろいろ悩むのが実習中の服装。附属の先生に聞くと、そんなに気にしなくても、ごく普通のものでいいということである。ただ女性の場合は、どうしても華美になりがちなので、多少気をつける必要があるかもしれない。何年前か、本当にスケスケの服を着て来た女子実習生がいて、その時は流石に授業にならなかったらしい。

編集部注

今年末から教育実習生用の宿舎が新築され、来年度から利用できる予定です。これによって実習生全員がここを利用でき、宿泊費の格差の問題は解消されることがほぼ確実となっています。

4. 青春19—エキゾチックDaisen—

環境科学コース 井上 智博

「着いたあー！」

—汗だくになって、海拔1,710.6mの地点に立っていた。涼風を身体に受けながらぐっと飲み干した缶コーヒーは、うまかった。次第にあたりは霧に包まれてきた—

今年の環境科学野外調査A(生物・地理学系)は7月11日~14日の4日間、鳥取県の大山において実施された。参加者は、根平先生、福岡先生、堀先生、中根先生の4人の引率教官と学生15人(環境12人、情報2人、社文1人)の計19人であった。

7月11日。各自がそれぞれの交通機関で大山共同研究所へと向かった。夕方には参加者の顔もそろい早速、乾湿計が百葉箱の中に取り付けられた。夕食後、巡検全体の目的や、大山の気象・地形・植生についてのミーティングが開かれ、自己紹介、たくさんさんのプリントの配布の後、各教官から3時間に及ぶ説明が行われた。

7月12日。8時頃までにゆっくりと起床した。大山山麓の朝は涼しく、冷房がなくても非常にすがすがしかった。9時頃研修所を出発し、登り口へと向かった。昨晚のミーティングで決まった気象、土壌・生物の3班に分かれて、各合目毎に先生の説明を受けながら調査が始まった。6合目あたりから高木も少なくなり視界が広がった。避難小屋付近で昼飯を食べた時は、それまでの疲れがふっ飛ばうようにうまかった。8合目を過ぎると、登山道も緩やかになり、すぐ左下の崩壊斜面や下界を鮮かに見下ろすことができた。登山開始から5時間40分後の15時21分、我々気象班はついに大山(弥山)の頂上に到着した。15時26分現在、南の風、風力4、天気霧、雲量10、気圧824.9mb、気温17.0°C、湿度92%、そして高度計は1,697mを指していた。また、その頃、地形・土壌班は山頂から少し離れた場所で大発見をしていたのだった。その夜のミーティングは、各班からのデータの発表等で非常に充実したものとなり終了時間を大幅に超えるものとなった。

7月13日。この日のモーニングコールは、優しい女性の声—ではなく、前日から研修所に来ていた鳥取大の女子大生のはしゃぎ声だった。昨夕の空模様から、嫌な感じがして外を見ると小雨が降って

た。雨の中で今日の調査は始まった。まず偏形樹を見に行ったのだが、昨年まであった木が今年はなくなくなって残念だった。大山道路の途中で、-1の沢、2の沢を観察したが、改めて大山の崩壊がいたる所で起きていることを思い知らされた。次に2の沢付近の森林で植生調査を行った。15m四方の正方形を区切り、植物社会学的調査、森林生態学的調査、地形調査の3班に分かれたが、雨の中での調査だけあって少々けだるいものを感じた。最後に大山寺周辺を観察したが、この時は、雨が小降りになったせいか割合楽だった。ミーティングでは、睡魔に襲われ先生の興味ある説明をうとうとしながら、聞いていた。しかし、その後の親睦会では、焼肉で元気を取り戻し、先生方(特に中根先生)の別の一面を見ることができ、とても楽しいものだった。

7月14日。天気も回復、研修所を出て大山道路のそばの露頭を観察した後、最後の調査地である皆生温泉へと向かった。ここは、人工的な離岸堤のため海岸線が独特な形をなしていた。海水浴に来ているカップルを横目で見ながら、地形と植生についての説明を受け、全調査は終わった。

今回の巡検は、災害保険のお世話になることなく無事終了した。この調査の結果は、11月17日の発表会で発表されるであろう。その時まで、自分はこの調査に関するレポートを書かなければならない。昨年の秋よりの悩みの種が一つ増えた今日この頃である。

P. S. この巡検はハードというほどのものではないが非常に充実していた。59生で自然に興味を持っている人は、たとえ環境の人でなくても来年参加してみてください。



5. シリーズ「数字」その3

2611

開かない窓、冬には全く忘れ去られていた開かない窓が、夏の訪れとともに——多分に憎々し気な視線をもって——注目されはじめる。窓と向き合う。風のかわりに硝子に映る自分の姿がとびこんで来る。プレハブの蒸し暑い一室だ。

暑い。一年生の「飛翔」委員数名に頼んで、総合科学部の校舎にある「窓」の数を数えてもらった時、私は「窓」を規定するものとして、一つ目に「開くこと」、二つ目に「人の出入りに使用されないこと」という定義を作ったのだった。それなのに、今、私の横にある窓は頑として開いてくれないし、私自身蒸し暑さと退屈な授業に辟易して、人目さえなければ——そして窓が開きさえすれば——この窓を乗り越えて逃げだしてしまうところなのだ。私の作った「窓」の定義は、暑さの中でこっぴみじんに砕けた。

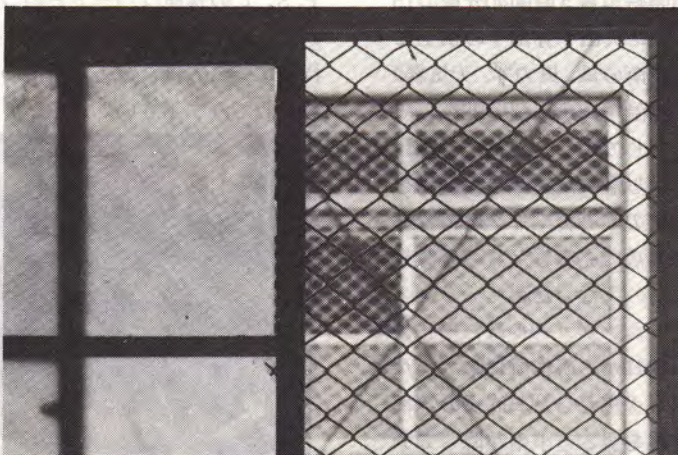
それにしても、これは窓が開かないのかしら、それとも私が閉ざされているのかしら？私は朦朧とした意識を奮い立たせようとした。黒板の前では、先生がラクダの話をしている。そう、例えば私がラクダだったら、窓が開かないのだ、と言ってしまえるのだろうか……

自分自身というものを含めて、何かを定義づけ書き留めるという作業をここ数年の間続けてきた。例えば、窓。しかし、この作業はきょう日、右往左往するラットレースに過ぎないようだ。笛吹き男の笛の音に踊らされて、定義の詰まった箱の中から早い者勝ちに言葉を探り出す。そのものの真実に当てはまろうがはまるまいが、とにかく定義を獲得したのだという満足感だけに支えられて、それによって何かを閉ざしたのだと思った。

しかし、それは確かにラットレースだった。閉ざそうとすること——定義を求めること、そのこと自体——がラットレースである以上、手に入れた者も入れなかった者も、やがては死に絶える運命にある。そして全ての定義が崩れ去ってゆくだろう。その時になって初めて、私は「閉ざした」のではなく、「閉ざされた」のだと気づくかもしれない。それとも、何の手出しも出来ないまま、茫然とそれを眺めるしかないだろうか。

プレハブの中の暑さは極限に達していた。意識が再び融け始める。その中で定義を失った窓だけが、相変わらず原色の光を透し続けていた。

(文責 向山 敦子)



6. シリーズ「知られざる総科」その1

健康相談室インタビュー

— 難波紘二教授に聞く —

編集 部

— 「健康相談室はいつ、どんな目的で作られたのですか？」

図「ここは総合科学部ができる前の教養部の時代からあって、学生の健康相談や体力作りの指導、といったものについてアドバイスをしたり、体力測定をしたりするためにあるのです。」

— 「利用者はどの位いるのですか？」

図「以前は自然科学棟1階の奥の方が部屋だったので殆んど利用者はなかったのですが、春に今の場所に移ってから、3カ月間に12~13人の利用者がありました。ここに来られる用件として例えば、『良い歯科医を紹介して欲しい』とか、『関節が悪いので良い整形外科はないか』といった風に、見知らぬ土地に来たために医者にどうかかったらよいかわからず相談に来る、というケースが多いですね。つまり正直言って、健康相談ということでここを尋ねて来る学生は少ないですね。」

— 「どこか体の具合が悪い、といって来る人はいないわけですか。」

図「いませんね。そのための施設としては本部直属の保健管理センターがそうで、ここは診療施設ではありません。診察して欲しいという人は皆、そっちの方に行ってください。この健康相談室の大きな仕事というのは保健管理センターで手をつけていない領域の仕事、例えば、保健管理センターでは過去にどういう病気をしてきたか、ということを調べているけれども、入学した時点で一体どういう病気をもっているか、ということについては調べられていないわけですね。そこで、今回ここでは、58年度にさかのぼって、広大に入学した学生がどういう病気を持っているか、ということについて調査している訳です。それによると、2,386人のうち360人が現在何らかの病気を持っていることがわかりました。そのうち特に、強度の貧血症や骨折、心疾患、血友病、といった、体育実技等の普通の大学生活を送るにはやや不自由な学生がいる、ということがわかりました。これは、そういう人をどういう風に指導していくかの対策を講じる前に必要な、実態調査になります。」

その次に考えていることは、普通なら体育実技等

は長期見学となってしまふ、そういった不自由な人のために、1年半位前から体育実技特別コースというものを設けて、調査を兼ねて体育実技の指導をしています。全国でもこういった特別指導をしているのは珍しく、広大、九大ぐらいですが、このことは余りよく知られていないのが現状ですね。しかし、そういう不自由な人こそ本当の意味で、適切な管理のもとでの体力増強が必要な訳ですね。それがなされていないところに大きな問題がある。

まとめれば、保健管理センターというのは“病気の予防・発見”という点に主力が置かれており、それに対して病気を抱えている人について生活指導や体力増強に主力を置いているのがここ、健康相談室なのです。

— 「ありがとうございました。」

— 聞き手後記 —

実際インタビューを要請されるまでは「健康相談室」なるものの存在さえ知らなかった。しかし、特に有病者の健康管理という、健康管理センターにはない重要な役割を果たしている、ということを知って驚いた。

また記事には載せなかったが、身障者を入学させておきながら、設備等の点でそれに対する受け入れ体制ができていない、と先生が大学側に注文をつけておられたのに、私も考えさせられた。確かに大学内を見渡せば、そういった設備は市街より整っていない。こういった受け入れ体制の不備を、保健体育という形で補っているのが、健康相談室である、と考えてよいだろう。

この問題は社会福祉の根本的問題、つまり、多数者の論理と少数者の論理、という「あっちが立てばこっちが立たず」の状況を象徴している。健康相談室の紹介という点からは、やや離れるが、このことについて目を向け考えて欲しいと感じたインタビューであった。

(文責 吉田 雄一郎)

7. 追悼

邪気のない人 — 三木先生のご逝去を悼んで —

フランス語講座 内藤 陽哉

フランス語講座の三木先生は2月19日肺ガンでお亡くなりになった。享年59歳。

去年7月18日に、夏休み明けには戻ってくるからと言われ残されて、広大附属病院へご入院になった。お見舞いにかがっていた時の、ベッドの上に坐り込んで話される様子からは、病状がそれほど進行しているとはとても思えなかった。しかし、内科的処置では思わしくなく、12月初め外科的処置を受けられてからは、手術それ自体からの疲労も加わってか、衰弱が目につくようになり、お正月すぎには、一度もお目にかかる機会をえないところまで病状は悪化していた。

ご入院前から気にかけていただいていた私自身の人事のことで、その結果のた1月中旬の教授会の後、ご報告にかがったのだが、今も記したように、直接お目にかかることもできず、ご家族にお伝えして帰宅するのは、いかにも心残りなことであった。きびしい寒さが続いていた冬の最中のことであった。後日のご家族のお話では、意識を回復された時に、その結果は確実に先生のお耳に達し、安堵されたとのことであった。

私が三木先生に面識をえたのは、広大に着任することになった6年半前のことであるが、その最初の印象は相当に忘れがたいものであった。数々のエピソードにつつまれた人物であることが、その後だんだんに分かってきた。

酒にまつわるエピソードになると、古くからのお知り合いの方に、それを語る適任者は多いと思われるが、研究室で、パンの耳をかじっていらっしやっ

たとか、なべの中に顔をつっ込んで、ぞうすいをかき込んでいらっしやっとか、この程度のことは驚くに当たらないだろう。

何しろ、大声で怒鳴られたものだった。今どき、あんなカミナリを大の大人によくも落とせるものだと思うのだ。文字通り刃りかまわずこのカミナリは落ちる。カミナリ同様、翌日はからっと晴天、まるでさわやかで、後に尾をひかない。勿論、尾をひかないのはご本人だけで、落とされたこちらは、さわやかどころではない。

邪気のない人であったと思う。ところが、邪気がないということは、今さら言うまでもなく、人畜無害ということではさらさらしない。おそらく、それは無邪氣的私害をまき散らしていく当人を許す一つの根拠に他ならない。したがって、これを忌憚なく言ってしまうと、迷惑をかけられながら、邪気がないから許さざるをえない、ということになると、こちらとしては迷惑の一方的なかけられっぱなしということになる。

またしかし、こんな人物も珍しくなったとも思うのだ。ということは、他人には迷惑をかけないように、当世はやりの気くばりをして、こざかしく生きるようになったということでもあり、これはまた寂しいことだと反省させられもするのである。

人の死というのは強烈である。先生は大正生まれだったから、「大正は遠くになりけり」というべきであろうか。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

三寺光雄先生を偲んで

自然環境研究講座 中根 周歩

今年6月5日に胃癌で逝去された三寺光雄先生は、広島大学の環境科学研究にとって不可欠な方でした。特に、日本の環境生態学の草分けの一人としての先生は私達環境科学を志向する生態学徒にとって大きな導き手でした。

三寺先生は昭和53年広島大学に赴任される以前は、永く気象研究所で御研究されておられた。そこでは従来から共同研究することの多かった千葉大学の沼田真先生らと植物の生態と環境(気象)要因との関連を草地、竹林および森林において精力的に御研究

された。この一部は先生の学位（理学博士）論文としてまとめられています。また、同じく沼田真先生がチーフを務める都市生態系に関する研究プロジェクトに一貫して参加され、都市の大気環境の特性などについて数々のユニークな業績を残されました。さらに、生態学者としては初めて人工衛星や航空機を利用したリモートセンシング技術を森林や都市生態系等の動態解析に用いられ、このリモートセンシング手法の有効性を先駆的に指摘されました。これらの研究成果の多くは、先生の主著書である「環境大気と生態」（昭和46年、共立出版）や「第三の災害」（昭和51年、東京堂出版）に端的にまとめられています。広島大学赴任後もこうした従来の御研究を継続されておられたが、赴任の年の6月に発生した江田島の山林火災は三寺先生の広島での御研究に大きな影響を与えずにはおきませんでした。瀬戸内海島しょ部に頻発する山火事は治山・治水で代表される森林の環境調節機能を一瞬にして消失させてしまう。その為、広島大学の環境科学者にとって避けて通ることのできない緊急かつ重要な研究対象でした。この江田島の山火事跡地の研究は同学部の高橋史樹先生らと共に「山林大火跡地の環境変遷」研究プロジェクトを結成し、水文・水質・生物相・地質・地形等の総合的視点から取り組まれました。この研究に寄せる三寺先生の情熱は人並みではありませんでした。御自身、江田島の山火事跡地をたびたび歩き廻ると共に、学生達に対しては「江田島をやらなければ卒論生としてとらない」とまで言われる程でした。この三寺先生の熱心さに押されて小生も山火事の研究に参加した次第です。三寺先生の御指導された江田島山火事跡地での水文調査や人工衛星ランドサットによるリモートセンシングの研究は各学会、学会誌で発表され、高く評価されており、特に日本生態学会では山火事研究の一大ブームを引き起こした程でした。

教育者としての三寺先生は学生達や小生にとって

心暖かく時には厳しい先生でした。また、ひとたび話が研究テーマや研究上の問題点に触れると1時間でも2時間でも議論されることがたびたびでした。しかし、意見される私達にとって少しも“押しつけ”を感じさせなかったのは先生の人柄に負うところが大きいでしょう。また、数多くの講義を担当されながらも必ず当日は朝3時に起床され、講義ノートを改めることを欠かしませんでした。そして、大教室にいっぱい広がる三寺先生の熱弁は聴講する学生諸君の心を強くとらえたことでしょう。一方、チューターを担当している学生が研究室を訪れると、多忙の中、時間をさいて親切に対応されていました。

そんな三寺先生が「背中が痛い」、「今日は朝から何も食べていない」とか言われ、夕方研究室のソファーに横たわれている姿が見られるようになったのは手術される半年前の昭和57年の秋でした。今思えば、このころすでに胃癌が進行していた時期ではなかったかと思われます。翌、58年4月に手術された時、医師は「半年はもつまい。」と言われたそうです。しかし、三寺先生は手術後、担当医師も信じられないと言われる程、1年余も元気な姿を私達に見せて下さいました。手術後退院され、東京の自宅で療養中の先生をたびたび見舞いに上がった小生を前にいつも2時間でも3時間でも、当面の研究について熱っぽく語られました。山火事、リモートセンシング、都市生態系、ヒマラヤ……と。先生のこの研究に寄せる計り知れない情熱とその気力がすでに転移していた癌の進行を押えていたと言えないでしょうか。お通夜の席で、沼田真先生が「三寺君は燃え尽きたんだなあ」と感慨深く言われたのが印象的でした。しかし、残された学生や小生にとっては、仮に炎は細くとも、もっと長く燃えつづけてはしなかったと思うのは偽らざる卒直な気持ちでしょう。

死を予期されてか、もう一度広島に行きたいと言われ実行された三寺先生にとって、広島での御研究は第二の青春ではなかったでしょうか。

故湯崎稔教授を追悼して

社会文化研究講座教授 芝田 進午

去る6月11日、総合科学部社会文化研究講座の湯崎稔教授が急逝されました。享年わずか53歳。まことに惜しく、痛恨きわまりないことであります。

湯崎先生は社会学を専攻され、その業績は多方面にわたっておられますが、ここでは、2つのことに限定して、記念と追悼の言葉といたします。

第1に、先生は、長年にわたり原爆被爆者の社会学的研究にあたり、広島市の爆心地の復元、死没者数の推定、外国人被爆者、とくに朝鮮人被爆者の問題についての提起などにあたられました。広島に対する最初の核戦争の被害の実態をあらわす資料の多くは、先生によって確定されました。先生は、この分野での研究と教育において学界の第一人者であられました。

第2に、このことによって、先生は、広島市が原爆被害の実相を内外に訴えるにあたっての資料や文書の作成に参画・協力され、そのことを通じて、ヒロシマの意味を世界に知らしめるうえで指導的役割を果たされました。また、先生は、原爆被爆者援護法制定運動ならびに核兵器廃絶運動に積極的に参加され、これらに大きく貢献されました。

これらの業績によって、先生は、核時代の社会学者、社会学者、ひろく言えば研究者のあるべき姿勢を先駆的かつ典型的に示されたのです。

ここに、先生の不滅の御業績を讃え、記念するとともに、先生の御意志をついで、とりわけ原爆問題の社会学的研究の発展に微力をつくすことを誓うものであります。

編集後記

真面目に編集会議に出たわりにはあまり仕事をしていなかったような気がする。まあ来年があるさ。

(岡本 光治)

窓数えて、蚊に刺されてしまいました。

(福田 智恵)

『飛翔』の仕事は非常に大変で、しかも非情だ。以上。

P.S. 来年こそ巨人がんばれ!! 乱闘事件があってもいい。市民球場の民主化を……。 (吉田雄一郎)

今回も発行予定日に間に合わなかったという、恒例の事態が起こりましたが、そこはそれ、あらかじめ事態を予測して、発行予定日もサバを読んでいたのでそれほど遅くもならず『飛翔』No.27を発行するにいたりました。それから、堀研究室のみなさん、“地図描き”でいろいろと御協力くださり本当にありがとうございました。コーヒーとクッキーとようかん、大変おいしゅうございました。この御恩はしばらく忘れません。(例の“○×海水浴場”の由来を発見した今日このごろ) (海堀 修)

メイン・テーマは国際性豊かな総科生になること。それは、夢で終わるのか。いや、実現させるんだ。そうさ、今こそ総科パワーを発揮して世界へはばたくんだ。アメリカが俺を呼んでいる。行くぜ!! アメリカへ…。なんて、思わず青春しちゃいました。でも、自らを異文化の中に放り込むことによって、今までと違った、新たな自分を発見することができる

かもしれないのです。あと大学生活も半分ちょっと。その間になんとか留学してみたい。それには英語が完璧でなくては……。I, my, me…自己嫌悪の波がおしよせる。(野田 啓三)

今、隣のシャム猫に夢中です。1歳くらいの雌で、澄んだセルリアン・ブルーの瞳、ひょいと伸びた耳、つんとすました鼻先、すらりとした身体、どこことなくO.ヘップバーンを彷彿させます。でも、シャイな私は声をかけることもできず、雄猫に生まれてこなかった自分を秘かに悔む毎日……。 (向山 敦子)

ということで、今回も新編集委員を迎え、なんとか『飛翔』No.27を出すことができました。『飛翔』では編集委員を募集しています。それから、自由投稿、その他御意見、御感想なども受け付けています。厚生補導係もしくは以下の編集委員までご連絡下さい。

最後になりましたが、原稿をお寄せいただいた皆さまにはいろいろご協力いただきました。紙面を通じて御礼申し上げます。

『飛翔』No.27

編集委員

56年度生 隠岐 幸代 桐木 淳二 竹下 斉 橋本 記一 山田 順二

58年度生 海堀 修 櫻井 幹士 野田 啓三 古川 哲史 向山 敦子

59年度生 岡本 光治 末松 浩嗣 福田 智恵 吉田雄一郎

なお、編集にあたっては、広報委員会の『飛翔』担当、堀 信行、水島裕雅、清水昭俊、鶴岡英一の各教官、および事務官、南沢大雄、内田精二の方々の協力を得ました。